

鎌倉期における『即身義』末積の研究

沼尻 憲尚

はじめに

現在、筆者は学術研究助成金制度に基づく共同研究において、『十卷章』の末積に関する研究を進めている。「末積」には撰述者独自の解釈や、撰述当時の思想背景等を考慮した内容が含まれており、これを時代ごとに分けて精査することによって、教理・思想展開の変遷を把握することができると考えられる。特に『十卷章』は真言教理の根幹となる典籍類であるから、これに関する末積を研究する意義は大きいといえる。そこで今回は、現在進めている作業の中から『即身成仏義』の末積書について、特に鎌倉期における末積書を採り上げて言及していく。

1, 鎌倉期における『即身成仏義』の末積を比較して

鎌倉期の『即身義』末積書は多数存在するが、ここでは以下のような、・道範（1178～1252）『即身成仏義聞書』（二巻）・頼瑜（1226～1304）『即身成仏義顕得鈔』（三巻）・頼宝（1279～1330）口説・杲宝（1279～1330）記『即身義東聞記』（十巻）

という三資料を取り扱っていく。それぞれの概要を簡単に述べると、・『即身義聞書』……嘉禄元年（1225）に行われた談義を道範が筆録した。・『顕得鈔』……頼瑜が正嘉元年（1257）に作成した。・『即身義東聞記』……正中二年（1325）中に杲宝によって記された。

となる。次に内容の一部（「題号」の解釈）を比較して、それぞれの見解がどのようなものかを述べていく。まず、『即身義聞書』は「訓読による解釈」と「字義による解釈」によって題号を解釈し、『即身義顕得鈔』では「属文」と「演義」の二門を設け、さらに二門それぞれに「正釈」・「配当」を設けて注釈している。最後に『即身義東聞記』は、「大綱」・「句義門」・「字義門」という三部門にて注釈している。これらの内容を表記すると以下ようになる。

解釈方法は三者三様であるが、そこには共通する解釈と独自の解釈とがある。最後にこれをまとめて結論としたい。

2, 共通する解釈について

・「即身成仏」は「当体成仏」を本拠としている。（三師共通）・「即身」→胎藏（身）, 「成仏」→金剛界（心）と配釈する。（三師共通）・三部・五智を配釈する。（頼瑜・頼宝に共通）

3, 独特な解釈について

・異本『即身義』に説かれる「三種即身成仏」を用いている。（頼瑜）・「即身」→極楽界, 「成仏」→喜足天とする。（頼瑜）・訓読によって「三大」に配釈する。（頼宝）

道範『即身義聞書』			
「訓読」による解釈	「身に即す」と読む		速疾の義
	「即の身」と読む		正釈で当体成仏の義
「字義」による解釈	即身	胎藏	身
	成仏	金剛界	心（智）
両義にて「当体成仏」を表す			

頼諭『即身義顯得鈔』					
属文門	正積	渉入・不離の義, 凡身に即して仏位が成る			
		速疾の義, 肉身に仏果を成す			
	配当	両部	即身	胎蔵	理(身)
			成仏	金剛界	智(心)
		所居の土	即身	極楽界	楽は身に受けるから
			成仏	喜足天	喜は心に受けるから
		四字共に両部	胎蔵・金剛界		
		四種曼荼羅	大・三・法・羯		
三部	仏・蓮・金				
五智	大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智・法界体性智				
演義門	正積	三種即身成仏(理具・加持・顯得)を指す			
	配当	一心	一心平等の不二門		
		二界	二界曼荼羅を全体とする		
		三密	本尊の三密により行者の三業を加持する		
		四曼	大・三・法・羯		
		五部	五部を一身とする		
		六大	六大をもって成る		

頼宝口説・臬宝記『即身義東聞記』					
大綱	一切衆生色心実相		衆生の色心は「仏体」そのものである		
	法身如來色相莊嚴		法身如來の色相は「理・智」法身である		
句義門	即ち身の成せる仏の義		「体」成仏	即→当体義, 身→衆生肉身, 成仏→常仏(当体即仏を指す)	
	身に即して仏と成る義		「相」成仏	衆生に善・悪の二相があるが, 法爾の仏が顕現した状態を指す	
	即身に身仏と成る義		「用」成仏	三密加持すれば速疾に顯発することを指す「速疾成仏」のこと	
字義門	両部門	即身	胎蔵	理(身)	衆生因人の肉身
		成仏	金剛界	智(心)	金剛界諸仏の果地
	三部門	即身	蓮華部	理	
		成仏	金剛部	智	
		義	仏部	理智不二	
	五智門	即	大円鏡智	不即・不離	金剛部
		身	平等性智	色心不二	宝部
		成	妙觀察智	成菩提	蓮華部
		仏	成所作智	覚行円満	羯磨部
		義	法界体性智	四智不二, 具足成就	仏部
	一字解釈	即	当体, 無碍, 常住, 相応, 輪円, 不離, 速疾の七義		
		身	衆生の所依身		
		成	成就義		
		仏	覚者義		
		義	義理, 四字各々の道理を指し示す		

むすびに

以上、「題号」の解釈を中心に論じてきたが、その解釈は著述者によってかなり相違していることがわかった。それは当時の思想背景を留意しながら、著述者なりの方法を選択した結果であると考えられる。(紙数の関係上、註略)

(大学院仏教学研究科仏教学専攻博士後期課程)